汲古一心

『宿屋の床の間』(一)

中村素堂

旅に出るということは何かしみじみとしたものを感じさせられて、ふだん家にいればそんなにも感激もしないようなささいなことにも妙に目新しい感慨がわいたりするものである。

むかしから詩人、俳人、歌人などの旅の好きな人が多くて、生涯の大部分を旅から旅へと送ったという話、その山水放浪の間の名作の喧伝されているものも少なくない。このごろは、全体に何かに騒然として飲んで食ってたのしんでという感じが溢れているように思う。

もちろんそれもまた旅の趣ではあろうが、平生の環境を離脱して、ふと身の周辺をかえりみる心、一抹の寂寥感とともに路傍の石ひとつにも惹かれるような時の眼には、謳わなくても詩心おのずから動くものはあろうというものである。

しかしまあ、こんな旅心地にひたるには気の合った友だちのひとり、二人と一緒あるいはひとり旅が最もふさわしい。

ひとり旅では淋しすぎるという人もあるが、ひとり旅ほど気の揃うものはないと静かに微笑んで旅の味をかみしめている人を見ると、古人の心に通うもの、旅の文学に深く触れあうものが今でも残っている思いがするのである。

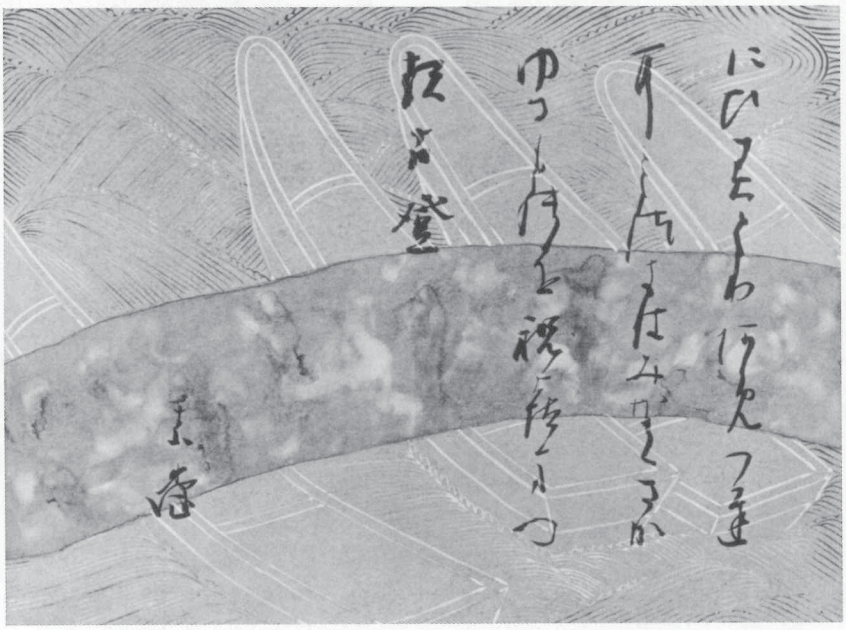
その旅の宿で、ゆくりなくも親しい人々の筆になる書の軸や、景仰している名僧の額など出逢うと、これはまた知らない土地で、知り人に行きあったほどの懐かしさを感じるものである。ではあるけれども、このごろの旅では随分いろいろの旅館に泊っても、めったにそういうものに邂逅しなくなってしまった。

名家の偽物を表装した軸、大家の画の複製のものものしいもの、田舎廻りの自称大家の山水など、そしてその下に欅の布袋和尚像などが置かれた宿屋の床の間、助からないものを感じたり、またおやっ——と思うようなうれしさに感じたりして、逗留の間の居心地を決定させられるのである。もっともそれはお前が安い宿屋へばかり泊るからで、少し奮発してごらん、相当なものを吊るさげているよと——いわれるかも知れないが。

京都の鴨川に面したS楼、富士のTホテル、旭川駅前のM屋など、たった一泊には惜しいような眼福なものを床に掛けていたこと、あるいは耶馬溪観光の途中で中食をした宿屋の床に、親しくしていた詩人の即吟の作を見たこと。長い月日が過ぎ去ってもまだまだ楽しい思い出となっている。

(つづく)

〈『仏教書道』昭和41年〉



にひみとりあめつちにみつきはみ
なくさかゆるものを祝きまつること
(ふぢばかま)　昭和56年